詩 42・43 篇の黙想（２）－2020 年 4 月 22 日（水）

なぜうなだれるのか、わたしの魂よ
なぜ呻くのか
神を待ち望め。
わたしはなお、告白しよう
「御顔こそ、わたしの救い」と。
わたしの神よ

（詩 42 篇６節・12 節・42 篇５節）

１．詩 42・43 篇のリフレイン

この詩には上記太字の「なぜうなだれるのか、わたしの魂よ」というフレーズが三回、繰り返されます。このリフレイン（繰り返し）が詩篇 42～43 を三分割するかたちになっています。

詩人による過去の回想　－渇きと嘆き－　42 篇１～５節（嘆き）
なぜうなだれるのか、わたしの魂よ（６節）
詩人による現在の心境　－激流と深淵―　42 篇７～11 節（嘆き）
なぜうなだれるのか、わたしの魂よ（12 節）
詩人による将来の待望　－聖なる山と神の祭壇－　43 篇１～４節（祈り）
なぜうなだれるのか、わたしの魂よ（5 節）

２、黙想（２）―「わたしたちの経験を詩篇にふれさせること」―

上記「　　」は旧約学者ブルッゲマンの言葉ですが、彼は信仰生活を図式化して

１）　方向がはっきりしている（順境）
２）　方向が見えずに苦しんでいる（逆境）
３）　驚いたことに新しい方向が見えている（新境地）

に分類しています。これはわたしたちが時の流れに従って経験することをうまく言い表しています。現在は個人単位ではなく、民族や、世界単位でこの状況「２」」が現れています。それは詩 42・43 篇の詩人の置かれた状況であり、混沌の象徴である「荒れる水」（激流・深淵）に悩まされる逆境です。詩篇を読むこと、音読すること、それをわたしたちの現在の状況にふれさせることを通して、わたしたちは自らの内にある言葉に出来ない想いを詩人の言葉にのせて告白することができます。「わたしたちの経験を詩篇にふれさせること」を通して、わたしたちもこれらの詩篇を自分の祈りとしてきた多くの信仰者たちの列に加わるのです。逆境は人生に必ず訪れます。試練のない人生はありません。問題はそのときに絶望することです。絶望が危険なのは、人生に対するポジティブな姿勢を見失わせ、神への信頼を失わせることによって自らの内側にわたしたちを閉じ込めることです。神さまとのリンクが切れることが問題です。わたしたちが、わたしたち自身に固着しても出てくる救いはありません。「わたしたちの助けは天地を創られた主の御名にある」（詩篇 124：８）からです。この神に「魂を注ぎだす」（5 節）ことに平安の鍵があります（つづく）。